

敗戦直後の英文学科

河村 昭夫

(1951年度 B, 1958年度 M, 1961年度 D)

昭和二十三年春、学校制度が変わり、大学予科（旧制）一年生であった私は横滑りの形で新制大学一年、学部学科は希望のところに編入できることになった。当時『蜻蛉日記』『土佐日記』といった日記文学に興味があった私は国文学科編入を考えていたが、親友の一言で英文学科志望に決めた。「そんな古くさい学科に入ったら就職に困るぞ」と彼はいうのである。戦前とはがらりと変わり、敗戦後の世の中はアメリカかぶれの時代になっていた。社会に出たらやはり英語が有利か、と私は彼の言葉に従った。

そのような意識で英文学科に入った私は、卒論作成の時期を迎えるまで、とくに興味を抱く作者や作品を決めることが出来なかった。淡々と授業に顔を出し、期末には試験を受けて履修単位を修得する。その合間に学資稼ぎのためのアルバイトをしたり、不安定な戦後社会に対する批判を強める学生達に誘われて、彼らと行動をともにしたり、周囲の雰囲気流されるまま日を過ごしていた。

こうして実りのない四年間を過ごしていた私は、当時の英文学科が誠に恵まれた環境にあることに気づかなかった。その環境とは学科の主立った先生方である。竹友藻風先生はダンテの『神曲』を訳され、『祈祷』『浮彫』など多くの詩集を出され、上田敏の愛弟子として詩人の地位を確立しておられた。ただし、先生は二十三年に大阪大学へ移られ、講師として主に旧制の学生を指導しておられたので、私達が先生に接する機会はほとんどなかった。

大塚高信先生。先生は英語学の権威市河三喜先生の後を受けて英語学者として多方面で活躍されていた。『英文法論考』『英語学論考』をはじめ、書誌学的な仕事『シェイクスピア筆跡の研究』を出され、さらに『新英文法辞

典』『英語表現辞典』などの編者として功績を残された。お酒が好きな先生の豪放快闊な性格はそのままの授業の雰囲気になじみ出ていて楽しかった。試験問題もいかにも先生らしかった。例えば英語学概論の期末試験問題。試験用紙を広げて目に飛び込んできたのは「should の用法について述べよ」の一問（小問題はなかったと思う）。どんな問題が出るかと教材の内容を必死になって覚えようとした我々は見事肩すかしを食らったような気がした。

志賀勝先生。関育ち母校に勤め、つとにアメリカ文学に注目し、病苦に悩まされながら『現代英米文学の研究』『アメリカ文学の序説』『アメリカ文学の成長』など多数の著述や翻訳を通して、従来英文学の一分野と見なされてきたアメリカ文学を一個の学問分野として確立することに大いに努力された。先生の授業の雰囲気は独特のもので、病身の先生がもの静かにアメリカ文学の話を進めて行かれる雰囲気が印象的であった。

四年度生になった私は、卒論のテーマとして、社会批判の傾向が強い作家を取り上げることにした。ジョン・スタインベックの『怒りの葡萄』か、それともアースキン・コールドウェルの『タバコ・ロード』と『神の小さな土地』の二作。いずれにするか迷ったあげく、コールドウェルの作品と決めた。

秋の終わり頃、卒論作成のことで、私は二三名の友人と先生のお宅にお伺いした。何も言わず、他の人たちがいろいろと質問しているのを脇で聞くばかりの私に、先生は「君は何をテーマにするの」と質問された。「コールドウェルの作品で、笑いの要素を考えてみようと思います」と答えると、「笑いの要素か。うーん難しいね」とおっしゃった。正にその通り。卒論の面接試問の際、担当の東山正芳先生は「これね、君、文学の論文じゃないよ。美学の論文だね」と一言。私はがっくりときた。

寿岳文章先生。書誌学を講じ、『ウィリアム・ブレイク書誌』や『本と英文学』、和紙研究の権威として『日本の手漉紙』を著し、民芸運動に貢献。ダンテの『神曲』の翻訳者でもある先生には、文学史や講読その他の授業で接する機会は多かった。先生は受講生が真面目に準備をしておれば、たとえ

間違っても優しく訂正されるだけであるが、不真面目な態度には容赦なく厳しく叱責された。その叱責の言葉にはいつまでも心に疼きをおぼえるものがあった。博識な先生は講義中によく余談をされたが、それが実に興味深く、いつまでも記憶に残る話が多かった。

このように学科のスタッフは素晴らしい方々であった。その気になれば先生方から教えていただくことは山ほどあったにもかかわらず、学部生の私はそのことに気づかず、のんびんだらりと日を送っていたのである。どれだけ損をしたことか、と思うが、今更悔やんでも詮無いことである。

卒業式の日、式後に学科生全員（三十数名）が集った教室で、先生方が送別の辞を述べられた。その中で今でも強烈な印象で記憶に残るのは寿岳先生のお言葉である。「誠に残念至極なことは、君たちが英文学というものを何と心得ているか、ということだ。君たちのほぼ四分の三以上のものがアメリカの作者や作品を卒論対象とした。それも英文学に多少とも関心を持った後でそれを選ぶのであれば、それもよからう。だが、君たちにはアメリカかぶれが目立ち、イギリス文学に関心を持ったものが四分の一にも満たないことは情けない。自分は英文学があつてのアメリカ文学だと考えている。ここに志賀先生が居られるが、あえて言わせて頂く。先生はしっかりとイギリス文学を修められた後、アメリカ文学に情熱を傾けて、多くの著述や翻訳につとめ、「アメリカ文学研究会」を主宰されたのだ。現に先生は『現代英米文学の研究』という英文学に関する著書を出され、榮譽ある岡倉賞を受賞された」と、憤懣やる方ない様子であった。

先生の悲憤の言葉を聞いていて、私は恥ずかしかった。自分が正にそれだ。英文学のことは何一つ学ぶことなく、アースキン・コールドウェルなどというマイナーな作家のものを卒論題目に選び、それで英文学を学び終えたつもりでいるおのれの浅はかさを真っ向から指摘されているようで、いたたまれない思いであった。大学院に進み、研究テーマとして英文学十八世紀を選んだのも、寿岳先生のその一言がこたえたからである。

寿岳先生と大塚先生は、私達の卒業と時を同じくして、闊学を去り甲南大

学へ移られた。今になって思えば、まことに無駄な四年間であったが、それでも知らず知らずのうちに先生方から何がしか教わるものがあったと思っているが、どうであろうか。

